

## 蕨城址公園

蕨市のほぼ中心部に位置する蕨城址公園は歴史と文化の薫り高い都市を醸し出しています。公園内には、ニュートンのリンゴの木、成年式発祥の銅像、サミエル・ウルマンの青春の碑（岡田義夫訳）などがある。

そして、濃い緑に囲まれた小高い一角に立派な「蕨城址碑」が建っている。



蕨城址碑 止軒

表面の揮毫は、号を「止軒（しけん）」と称する昭和三十五年に文化勲章を授与された文学博士の「諸橋轍次（もろはしてつじ）」先生でした。諸橋先生は、昭和四年〜同三十五年の約三十年間の長き年月を重ね「大漢和辞典」の大事業を完成させた編者という。

碑の裏面には、これこそが「蕨城の歴史」

であるという文章がコンパクトに書かれています。

それによると『渋川義行（よしゆき）』の代にこの蕨の地は室町幕府より知行されていた。その義行の曾孫の渋川義鏡（よしかね）が、京から鎌倉へ下向する足利政知（あしかがまさとも）の補佐役として従ってきた。その時、渋川義鏡により蕨城は築城された。

その後、戦国時代に入り城主は義鏡の孫・渋川義基（よしもと）となる。そして、蕨城は徐々に後北条の傘下に組み入れられ、義基は房総三舟山に出陣し里見氏との戦いで討ち死にし、城主不在の蕨城は廃城となってしまうのです。江戸時代に入り徳川家康は蕨城址に鷹狩り場の御殿を造っていた。

昭和三十六年十一月三日諸橋轍次撰文』  
となっている。ではこの撰文の中身を私見であるが、次にひも解いていきましょう。

### 蕨城主渋川氏のルーツ

渋川氏の大本は、第五六代清和天皇に遡り

ます。清和天皇の第六皇子・貞純親王（さだずみしんのう）が臣籍降下し清和源氏の祖となります。その貞純親王から六代目が有名な「源八幡太郎義家」です。

その義家の孫・源義康（よしやす）が下野国・足利の地を拝領し領国としたので「足利」姓を名乗り足利家初代となります。

そして、この義康の次男・足利義兼（よしかね）が二代目となった時代、治承四年（一一八〇）八月に源氏・宗家の源頼朝が石橋山で「平家打倒」の旗上げをします。その源頼朝の旗上げにいち早く足利義兼は馳せ参じます。そして、源平合戦では数々の勲功を上げます。



足利義兼

義兼は北条政子の妹・時子を娶り、北条氏とも姻戚関係を作り固く繋がり、源氏一門と

して鎌倉幕府の御家人の最上位に列することとなります。

この足利義兼は、正治元年（一一九九）鎌倉幕府征夷大将軍・源頼朝が不慮の事故で亡くなると、足利義兼は間もなく出家し、子の足利義氏（よしうじ）に足利家三代目の家督を譲り、足利荘（あしががのしょう）に隠棲し、鑿阿寺（ばんなじ）を創建します。また、足利学校の創設にも関わります。（足利学校創設には異説があります。）



鑿阿寺



足利学校

そして、頼朝亡き後、鎌倉幕府は執権の北条家が実権を握り、頼朝の忠臣・梶原景時の追放討滅、また、頼朝の乳母一族・比企家の壊滅と二代将軍頼家の追放暗殺や、侍所別当・和田一族の討滅、さらには三代将軍・源

実朝の暗殺など血生臭い闘争を繰り広げ、ひたすら執権政治の強化を進めていくのです。

足利家三代目・足利義氏も鎌倉幕府執権の北条家から正妻（北条泰時の娘）を迎い入れ、「承久の乱」には、二代執権・北条義時の重鎮として活躍し、鎌倉幕府の執権制度確立に協力していきます。

次に、足利家四代目は足利泰氏となり泰氏も北条家から妻を迎え入れ権力闘争に巻き込まれないように気配りしていきます。

この泰氏の次男・義頭（よしあき）が、鎌倉幕府三代執権北条泰時の時代（一二二五～一二四五）に、上野国渋川荘を知行され、ここから「渋川」と称し、渋川義頭が渋川家初代となって、宗家・足利家一門の中でも家格も上位として行動していくのです。

\* \* \*

鎌倉幕府八代執権・時宗の時代。文永二一年（一二七四）と弘安四年（一二八二）の二度に亘る「蒙古軍の来襲」があり、これに参戦した御家人への恩賞もなく、また、鎌倉幕

府の財政も徐々にひっ迫していきます。

この時の宗家・足利家は鎌倉報国寺を創建した・六代目足利家時です。しかし、北条執権家の内紛・家督争いの二月騒動（一二七二）の時に巻き込まれ「我より三代の後、天下を執れ」という「置き文」を残して自害しています。（伝説）

渋川家では二代目渋川義春となります。歴史上では生没不詳ですが、義春もまた北条家の家督争いの二月騒動（一二七二）に巻き込まれたのか佐渡に流され、しかし、北条家より正室を迎えている関係からか一年後許され鎌倉へ帰還しています。そして、妻の母からは「武蔵国大麻生郷（熊谷市）を譲られています。足利家一門では家格が高い位置で活躍していたものと推測されます。

宗家・足利家七代目は足利貞氏（さだうじ）となります。ここで初めて、北条家以外の上杉家から側室ですが、上杉清子を迎い入れます。この清子は室町幕府を成立させる「足利

尊氏・足利直義」兄弟の母となります。この兄弟が、六代目足利家時の「置き文」を実行し、後に尊氏が天下を執ることとなります。

渋川家三代当主は**渋川貞頼**（さだより）となりますが、こちらも生没年不詳です。しかし、足利尊氏の弟・足利直義へ娘の**頼子**（らし）・本光院を嫁がせています。**渋川家**の歴史上の資料は希薄ですが、本光院と直義の婚姻のことは、渋川家は足利家の一門としてますます重きをなしていく証左となっています。

この頃、京の朝廷では鎌倉幕府倒幕の計画が着々と進められています。**渋川家**もこれから起こる鎌倉幕府の討幕に活躍していくものと推測されます。

### 室町幕府と

### 渋川家の動向

第九六代後醍醐天皇は鎌倉幕府の討幕を

目指すが、この計画は側近・吉田定房の密告

により失敗し、結果、天皇は隠岐の島に配流されてしまいます。

しかし、正慶二年（一三三三）後醍醐天皇は隠岐を脱出し鎌倉幕府の討滅に再び立ち上がります。これに対して鎌倉幕府は、足利尊氏を総大将とする大軍を京に向け発進させます。足利尊氏は三河国に着き、足利一門十三家とともに後醍醐天皇の論旨に従って、逆に鎌倉幕府の六波羅探題を攻め滅ぼし、同時に鎌倉は新田義貞軍によって壊滅され、ここで**鎌倉時代**から、「後醍醐天皇の新政」を経て、足利尊氏の**室町時代**へと時代は代わっていくのです。



足利尊氏

この時、**渋川家**は、四代当主は**渋川義季**（よしすえ・一三三四〜三五）になります。足利家の**廂番**（ひさしばん。將軍近侍）のトップ

に名を連ねています。

さらに父・**貞頼**（さだより）から先代からの地「武蔵国大麻生郷」（熊谷市）を譲られています。

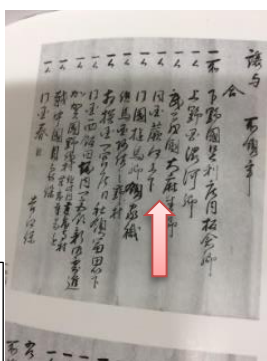
その**義季**は足利直義に従って鎌倉に赴き、鎌倉幕府十三代執権・北条高時の遺児・北条時行の鎌倉奪還の「中先代の乱」（一三三五―建武二年）の戦いの時、大将を務めた**渋川義季**は残念ながら二三才の若さで敗死してしまふのです。

しかし、後年には娘の**幸子**（こうし）が宗家・足利家二代將軍足利義詮（あしかがよしあきら）の正室に迎えられます。嫡子が生まれますが夭折してしまいます。

その後義詮の側室・紀良子（きのりょうし）・順徳天皇の孫（が）が生んだ**義満**（よしみつ）を育て上げ、これが足利三代將軍**足利義満**となり、勘合貿易を興し室町幕府を隆盛に導き、金閣寺を建立、また、観阿弥、世阿弥を保護し、能狂言など室町文化の華を咲かせていくのです。

**渋川家**の五代当主は**渋川直頼**（ただより）

一三三五〜五六)になりました。当初は足利直義に従っていましたが、足利尊氏と直義兄弟の争い「観応の擾乱(かんのうのじょうらん)」期は、足利尊氏側に従って室町幕府成立に貢献し、兄弟の幸子が足利二代將軍の正室のためか、また、**直頼**の妻は、尊氏の執事・高師直の娘であり、これも関係するのですが、備後国御調郡(びんごのくにみつぎごうり)他十二ヶ国二十二ヶ所を所領することとなったようです。そして、**渋川家**は京都に於いて、足利將軍家を支える管領家と同格か、或いはそれ以上の高家に列せられていくのです。



渋川直頼讓状「武蔵国蕨郷上下」(広島県三原市・賀上晋次家所蔵)  
「蕨市史通史編」

次に**渋川家**の六代目当主は**渋川義行**(よしゆき・一三四八〜七五)になります。宗家・足利家は勢いのある**義満**の時代でした。**義行**は父・**直頼**から譲られた備後国御調郡(みつぎぐん)に加え、幕府より備後・備中の守護にも任じられ、さらには九州探題を命ぜられるのです。

父・**直頼**から領国は「**渋川直頼讓状写**」として「**蕨市史・通史**」(平成七年刊行)に掲載されていますが膨大な領国です。



参考資料  
蕨市史 通史編

この中に「**武蔵国 蕨郷上下**」とあり、「**蕨**」の名称が歴史上に初見となり、「**蕨郷**」は**渋川直頼**の時代には既に**渋川家**の知行国として存在していたのです。十二ヶ国二十二ヶ所を列記します。

- 一所 下野国足利庄内板倉郷
- 一々 上野国渋河郷
- 一々 武蔵国大麻生郷
- 一々 同国蕨郷上下
- 一々 同国遊馬郷領家職
- 一々 但馬国阿佐之野村
- 一々 相模国一宮庄同社領富田以下
- 一々 同国西飯田堀内一宮領新寄進
- 一々 加賀国野代村
- 一々 越中国目良保
- 一々 同国春日 吉江保
- 一々 所 信濃国有坂郷
- 一々 同国長土呂郷
- 一々 陸奥国酒谷村
- 一々 同国小紫村
- 一々 出羽国沼木郷
- 一々 同国赤坂郷
- 一々 備後国御調別宮
- 一々 同国山南郷
- 一々 同国福代村
- 一々 佐渡国守護職
- 一々 同国山田村

そして、**渋川家**は七代目の**渋川満頼**(みつより・一三七二〜一四四六)になり父・**義行**の九州探題を引き継ぐとともに撰津、安芸国の守護にも任命されています。

九州にては朝鮮貿易にも関係した活躍が見られるが、子の八代目**渋川義俊**に探題職を代行させ、**満頼**は上洛し、京にて公家などとの交流を図り**渋川家**は京都に落ち着き、**京都****渋川**となり、膨大な知行国よりの上納があり

満頼は京の公家文化の中に入っていきます。そして、満頼は文安三年（一四四六）七四歳の生涯を京都で閉じていきます。この満頼の流れが関東渋川となっています。

渋川家は八代目を渋川義俊（一四〇〇〜三四）が継ぎます。九州探題は引き継ぎますが、任の途中でその職を従兄弟の・足利満直に譲り隠棲したようです。そして、この満直系が九州渋川を継承し、備後・備中の守護も任じられていきます。

\* \* \*

宗家・足利家は、將軍足利義持が後継者の指名無しで死去したため「くじ引き」でつぎの將軍を決めることになりました。「くじ引き將軍」には、足利義教（よしのり）が選ばれ、室町幕府六代將軍に就任します。永享元年（一四二九）のことです。

この將軍職の「くじ引き」という決め方を見た遠くの鎌倉においては、我も「將軍を狙う」という「鎌倉公方・足利持氏」が動き出し、これを諫めた関東管領「上杉憲実・（足利学校と金沢文庫の再興者）」との間で内紛が

発生します。

これに対し京の足利義教將軍は関東管領・上杉憲実の鎌倉へ幕府軍を派遣し鎌倉公方・持氏を自害（永享一年・一四三九）に追い込んでしまうのです。

一方、この義教將軍も、守護大名の赤松満祐に暗殺されてしまうのです。嘉吉元年（一四四一）のことでした。このように宗家・足利家は室町幕府を統治する力に少しずつ陰りが見えてきました。

#### その後の

#### 鎌倉公方

持氏の自害により鎌倉府は廃止され、鎌倉公方不在の時を過ぎしてきました。その間は関東管領上杉家が武蔵国を統治していたのです。

嘉吉元年に室町幕府將軍・足利義教が暗殺された後、京では足利家による政治統治が少し不安定な中に八代將軍として足利義政（1449〜1474）の時代に入っていきます。



足利義政

ここで、鎌倉では「鎌倉府」再興の運動が開始され、持氏が自害に追い込まれてから八年後、持氏の遺児・足利成氏（しげうじ）が十才の若さで、文安四年（一四四七）室町幕府から鎌倉公方に承認されます。

この新しい鎌倉府は、鎌倉公方に足利成氏、その補佐役の関東管領には山内上杉家の上杉憲忠（のりただ・上杉憲実の嫡男）が就任しました。

しかし、成氏がまだ幼年のため、これを支える旧持氏派と上杉派との内部抗争が、またもや湧き上がってきたのです。

さらに、成氏は父・持氏を死に追いやったのは上杉憲実と思いきも、享徳三年（一四五五）一月一五日、成氏は、憲実の嫡男の関東管領の上杉憲忠を御所に呼び寄せ謀殺して

しまうのです。

これに対抗して、山内（やまのうち）上杉家は、憲忠の弟・房頭を後継とし、室町幕府の支持を得て、幕府をバックにして成氏と対決していくのです。

この攻防が関東一円に拡大し、鎌倉公方・足利成氏は、関東管領山内上杉と扇谷（おおぎがやつ）上杉の連合軍と戦闘を繰り返していききます。

成氏は北部、東部の武蔵国の豪族を傘下に持ち、今度は「古河」を拠点とし「古河公方」として、鎌倉の上杉連合軍と対峙し、さらには宗家・足利の室町幕府まで敵としてしまうのです。

これが、『享徳の乱』「享徳三年（1445）〜文明十四年（1483）」として二十八年間続くのです。そして、世は徐々に戦国時代に入っていくのです。

この「享徳の乱」に渋川家も大きく関わり、京都の宗家・足利一門のなかで名門として存在している京都渋川家も室町幕府足利家と足並みを揃えて揺れ動いていくのです。

## 渋川義鏡の downward

先に述べたように古河公方・成氏が室町幕府及び宗家・足利家に対しても対抗にすることに幕府も見逃す事が出来なくなってきた。

また康正二年（一四五六）には、古河公方の有力武将、関宿城主・梁田持助（やなだもちすけ）が武蔵国足立郡の過半を押さえていく事件がおきた。

そこで、新たな鎌倉公方を送って、これを排除し関東を支配する必要があった。

そこで、古河公方足利成氏を征討するため長祿元年（一四五七）、幕府は仏門にあった天龍寺香厳院主（政知→まさとも→義政の兄）を還俗させ「足利政知」として関東に下すこととしました。

この下向にあたり補佐役として足利一門の名家渋川家九代目当主・渋川義鏡（しづかわよしかがね→生没不詳）が選任されたのです。（八代目義俊の子、又は満頼の子とも意見が分かれています。）

政知に従った渋川義鏡の関東下向は長祿

三年（一四五九）の七月下旬ころと推考されます（蕨市史より）。

下向した政知らは直接鎌倉へ入ることはかなわず、まず山内上杉氏と関係の深い伊豆奈古谷（なごや→静岡・韮山町）の国清寺に入り、のち堀越（ほりごえ）に移って政治活動を行い、「堀越公方」と称された。

義鏡は公方政和を補佐して成氏討伐に当たらずだったが、足利一門としての権威の尊重はされたものの、公家文化育ち義鏡の軍事力の弱体は、関東管領山内上杉氏と扇谷上杉氏との協力関係を得られずなかなか実績を挙げることができなかった。

管領上杉と上杉扇谷の連合軍も武蔵の太田庄（群馬県板倉町）にて古河公方軍に大敗し、堀越公方側の軍事力の弱さを露呈し、古河公方の北関東における優位が明らかになり、幕府や堀越公方の権威は失墜したのです。

そして、堀越公方の弱体化に輪をかけたのが、京の室町幕府の「応仁の乱」（応仁元年一四六七〜文明九年一四七七）の争乱です。

それにより、「新鎌倉殿」として下向した足利政知とその補佐役の**渋川義鏡**は、梯子を外され孤立状態になり、両上杉家を頼ることとなります。

### 蕨城の築城

**渋川義鏡**は、特に扇谷（おおぎがやつ）上杉家の家宰・太田道灌を頼ることになったと推察されます。



太田道灌

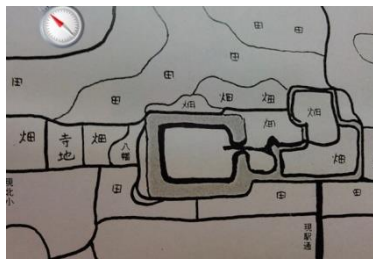
古河公方・成氏に対抗して太田道灌が築いた河越・岩付・江戸の三城の軍事防衛ラインに加え、**渋川義鏡**が渋川家先祖伝承の地「**蕨郷**」に築いた「**蕨城**」もそのラインに組み入れていったと思われます。

その「**蕨城**」の築城時期は明確な資料は見つかっていないが、**渋川義鏡**の関東下向（一

四五九）後、余り時を経ない時期に、**板倉氏**ら家臣により築城されたと考えられる。

その「**蕨城**」の規模については「**蕨市史**」に記載されている（162ページ）

弘化三年（一八四六）の成立と伝える「**蕨御殿の図**」を検討してみると、御主殿を祀る主郭とおぼしき方形（ほうけい）の曲輪（くるわ）を中心に南は二つの曲輪、北にも曲輪状遺構が配されており、微高地の上に南北に連続した連郭式（れんかくしき）の曲輪配置が読みとれる。



弘化三年（1846）に写された「蕨御殿の図」  
蕨市史 通史編

また、主郭は『埼玉県史料』によると、郭

内部・土居（どい）・堀を含めおよそ七〇間（約一二六段）四方、面積は一町六反五畝歩

余（約六千坪）、方形館の形状を呈し、壕堀（こうほり）の幅は六間（約一一段）、壕堀の内部には幅四間（約七・三段）の藪土居（やぶどい）がめぐらされている。但し、土居高、壕堀などの形状や深さなどについては記述がなく明らかではない。

郭内の広さは古図面に縦四八間（約八七段）、横三六間（約六五段）とあり、およそ五反七畝一八坪（約一八〇〇坪）となる。

但し、城郭の面積については種々の見解があり、『**蕨市の歴史**』では一町四反歩余（やく四二〇〇坪）、『**わらびの歴史**』（蕨市教育委員会）では堀内九反四畝一步（約二九〇〇坪）、外輪地一町七反九畝二六歩（約六四〇〇坪）としている。

また、「自治資料埼玉県史蹟名勝天然記念物調査報告」（大正十五年）では、『和楽備神社南方約三千坪の地』としている。

「主郭の南には虎口と馬出しが認められ、付属の郭に続いている。馬出しには、近世初頭に蕨御殿が置かれたらしく「御殿村」の地名を遺している。（大正十五年当時）

主郭の東北には壕堀（幅約11m）に隣接して、武の神である八幡社（和楽備神社）が祀られている。「**蕨城**」の北西には三学院や本法院・宝蔵院、東南には渋川氏の菩提寺である宝樹院があり、近くには家臣も居住して「**蕨城**」の砦の役割を果たしていたという。

また、「**蕨城址**」の東南には「要害」「防止」という城郭ゆかりの字名（大正十五年当時）も残っている。」と記載されています。

### 「蕨城」の渋川氏

鎌倉時代の仁治元年（一二四〇）頃、**渋川義頭**が興した「**渋川家**」は、常に「足利家」の興廃と歩調を合わせてきたものと推察され、鎌倉時代には源頼朝の旗擧げに貢献したが、頼朝亡き後には、ひたすら足利家の中で北条執権と婚姻を重ね、宗家・足利の清和源氏の流れを絶やすことなく、「忍」の一字で過ごしてきたようです。

そして、足利尊氏の時代には、この「忍」が一気に解き放され、都を「鎌倉」から「京都」に遷し、室町幕府を築いていくのです。**渋川家**も当然、足利尊氏の重鎮としての一翼を担っていきます。**渋川家五代目直頼**時代から**大領国主**となり、七代目**満頼**の時代には京の都文化に仲間入りする**武家から公家世界に近い日常（貴人）**を送っていたものと推考されるのです。

このような世界に育った「**渋川義鏡**」が**蕨城主**となるのです。歌詠みの世界にも通じていたようです。このことも文武両道の江戸城を築いた（一四五七―長祿元年）太田道灌に近づき、扇谷上杉の家宰を勤める太田道灌の勢力範囲に徐々に組み込まれていくようになります。

**義鏡**の行動については文明九年（一四七七）に太田道灌が用土原（寄居町用土）の合戦で、長尾景春を破ったときに道灌方として武勲をあげたというが、生没年は不明となっています。

**義鏡**は、また、実子の**義廉**（よしかど）を

京都管領の**斯波家**（しばけ）の当主として送り出して、京にても**渋川義鏡**はまだ名家となっているようですが、**斯波家**の勢力争いに敗れた**斯波義廉**（しばよしかど）の失脚と、宗家・足利家の衰退とともに**渋川氏**は国人領主クラスとなり、太田道灌と連携もしくは従属の道をたどることになっていきます。

\* \* \*

一方、伊豆では**北条早雲**が勢いをつけ、明応四年（一四九五）には、堀越公方二代目・茶々丸を追放し伊豆地方を手中に収め、さらに文正十三年（一五一六）に至って、相模国を平定し戦国武将・下克上のトップバッターとしてのし上がってきました。



北条早雲

さらに余勢をつけ武蔵国へも領土拡大の意欲をみせ、上杉家の江戸城や岩付城、河越



城も視野に入ってきたようです。そして、後北条軍対山内上杉・扇谷上杉・古河公方連合軍との間で一触即発の戦いの様相が一層濃くなってきました。

この時、蕨城主は**渋川義堯**（よししたか）が十代目となっています。**義鏡の嫡子とも養子**ともいわれていますが、この後北条と両上杉・古河公方連合軍の戦いに「蕨城」はある時は後北条、また、ある時に扇谷上杉に組み入れられ翻弄されていきます。

天文一四年（一五四五）、北条氏綱（後北条の二代目）と反北条連合軍の間で雌雄を決する「**河越夜戦**（かわごえよいくさ）」が始まりました。結果は北条氏康軍の大逆転の大勝利となります。

これにより、古河公方は次第に衰退に向かい、上杉方は越後の長尾家に落ちていき「長尾家」に「上杉」の名称を譲り、長尾景虎が『**上杉謙信**』を名乗っていくのです。

\* \* \*

このことから、お分かりのように「蕨城」と**渋川義堯**は北条氏康の傘下に完全に入れ

られていると推考されるのです。また、ここでも**渋川義堯**の生没年は不詳になっていきます。

**蕨・渋川家**は一代の**渋川義基**となり、「蕨城」の城主になりました。この頃は、岩付城（岩槻市）も後北条・北条氏康の傘下となつてしまふ。後北条氏は、武田信玄、上杉謙信と攻防を繰り返すような戦国大名にのし上がっていくのです。

一方、房総の雄・里見家は没落していく古河公方を受け入れたり、ある時には上杉方と同盟を結んだりしていたので、北条氏康は、里見氏を武力で傘下に収めようと北条連合軍を組織し進軍を計画します。

北条軍は、永禄一〇年八月（一五六七）**房州三舟山**（君津市）に於いて、里見軍との間に戦鬪を繰り広げます。

その中には**渋川義基**も家臣団を率いて北条氏の武将として参戦することになります。しかし、北条軍は里見軍に敗退してしまいません。

この時、**渋川義基**は、家臣とともに出陣し

自らも奮戦したが武運拙く討死にしてしまふのです。

そして**渋川城主**とともに奮戦した家臣団の生存者たちは、「蕨の地」に帰り農民となり、その後、徳川家康の慶長一七年（一六一二）に開創される「**中山道蕨宿**」の「**宿役人**」などで活躍していくのです

また、城主夫人貞子は、郷里・長念寺（群馬県室田村）に帰りひたすら、夫の武運長久を祈ったが、討死の報に触れ夫の**渋川氏**の悲運を嘆き悲しんで、侍女一人を伴い上州榛名湖（はるなこ）に入水自殺したという**宝樹院**に伝わる「**宝樹院殿・龍體院殿**」伝説も、この時の討死を契機として生じ、後世に伝えられることになったようです。

### 渋川氏の家臣たち

足利家一門の名家として誇り高い**渋川氏**の家臣団の多くは、**渋川義鏡**が京都から「**新鎌倉殿**」の足利政知の補佐役として下向（長禄三年―1459）してきた時に従ってきたので

はないかと推察しています。

故に**家臣団の多くの「ルート」**は武家政権発祥の鎌倉、或いは室町文化の雅な京都に遡るものと推考されるのです。

そして、その名の一端は、後年の成立になる記録・系図の資料から、その大要は**渋川義基**とともに討死した家臣名などから知ることができようです。

「蕨市史通史編（165ページ）」

「蕨城主公戦死略歴」（庄野家旧蔵）によると、『上総三舟山合戦において、「智仁勇、三徳の若大将」である**渋川左衛門尉正清（義基）**は、第一軍は塚越五郎左衛門勝成、第二軍は、岡田織部隼人、第三軍は倉田十郎義康、第四軍は鬼茂忠、第五軍は大将正清（義基）が統率し旗本庄野栄左衛門義春を従えて出陣、その勢は三千余騎であった。』と書かれている。

右のうち、岡田氏は蕨宿開創の宿役人家として知られ、三舟山合戦では織部隼人は第二軍の統率者であった。「岡田家系図」によると、合戦後の元亀元年（一五七〇）には足立郡に居住し、蕨宿草創期の問屋（といや）・名

主・本陣の三役を勤めた正吉の父・佐渡守正信が三舟山合戦で討死したとなっている。

また、庄野栄左衛門義春は旗本として随従し討死している。

「蕨市史通史編（166ページ）」には、渋川氏の家臣で注目すべきは板倉氏であると書かれている。

**渋川義鏡**が下向の際には、**板倉大和守頼資**が先達として下向し、終始渋川氏の有力被官として活躍し、また、**渋川義鏡**が太田道灌に文明九年（一四七七）用土原で協力した時に**板倉氏**の名が見えるという。

また、「板倉家系図」によると、**板倉頼重**は、**渋川義基**の弟とされ、**頼重**は三国国額田郡小見村に移り、松平氏に仕え、その孫・**勝重**が徳川家康に仕えて慶長六年（一六〇一）**京都所司代**に補任されている。

江戸時代の文化一三年（一八一六）、蕨宿では、**渋川氏討死二五〇回忌**に当たり、家臣の子孫**高橋・今井・町田・山田・河島・貫井・永島・庄野**の諸氏らの手で**渋川氏夫妻**の石碑が建立され、右の各氏が**渋川家臣**を称していた

ことが確認されるのです。



宝樹院墓所  
渋川公夫妻  
二五〇回忌  
の供養塔

**貫井氏（初め高山氏）**も**板倉・高橋四郎・高橋九郎・岡田氏**ら五人と共に三舟山合戦に従い、渋川氏討死後は蕨に帰り農民になったという。

この外、蕨開発の七人―**榎本・金杉・松田・石井・山岡・池上・山田**の各氏、並びに慶長一七年（1612）蕨新宿取立に際し、**岡田氏**と共に上・下戸田村より蕨へ来住してきた**鈴木・今井・荒木・高橋・町田・久勢・細井氏**ら重立ち農民の中にも、**渋川氏**ゆかりの人々がいたと思われる。



藤宿「本陣」  
のモニュメント  
(設計・谷口吉郎氏)

### あとがき

以上藤城主渋川氏について考察してきましたが、冒頭に『歴史と文化の薫り高い都市を醸し出している藤市』と書き出しましたが、まさしく「藤城主渋川氏」は、ルーツとしての源氏の威厳を持ち、また、足利將軍時代の雅な公家文化も併せ持つ代々の「渋川家」であったらうと強く感じられました。その「渋川公」に臣従してきた家臣に於いても「渋川家の家風」を十分に受け継ぎ、今も足利家一門の名家としての誇りを持ち続けているものと推察しているのです。

今回の渋川氏に関する資料が少ないと感じられたので、足利家、上杉管領家などできる限りの範囲で調べ関連させてみました。そこには出自として鎌倉時代の時代背景があり、特に北条執権時代の足利家一門の「雌伏の時代」と室町時代の足利家と渋川家の「蜜月時代」を自分なりに参考文献から書き出してみました。また、堀越公方の「足利政知」のナンバー2として下向された渋川義鏡は『貴人』であったと推考され、これが太田道灌と結びついた一つの要素ともあったと考えています。また、「家臣団」の家名にしてもそのほか多くの方が「藤市史」に書かれています。紙面の範囲で割愛させていただきました。まだまだ、渋川氏一家の歴史についての考察は不十分のことが多いと思っています。今後とも関連資料を勉強し続け、補完できるものがあれば修正していこうと思っています。幼稚な文章ですが、お読みいただきありがとうございます。

完

### 参考文献

- 藤市史 資料編 古代中世 平成三年発行
- 藤市史 通史編 平成七年発行
- 藤市 一本杉塚保存会資料
- 鎌倉観光文化検定テキスト
- 日本古代中世人名辞典 吉川弘文館
- 戦国人名辞典 吉川弘文館
- 日本人名大辞典 平凡社
- 人物フアレンス辞典 紀伊国屋書店
- 戦国期足利將軍研究の最前線
- 日本史資料研究会 山田康弘
- 中世足利氏の血統と権威 吉川弘文館
- 中世武蔵人物列伝 谷口雄太
- 足利兄弟 岡秀文 双葉社
- 足利の乱 呉座雄一 中公新書
- 騎虎の将 太田道灌 徳間書店